

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 16 日現在

機関番号：32629

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24720320

研究課題名(和文)近代オスマン帝国におけるムスリム知識人の帝国意識に関する基礎的研究

研究課題名(英文)Muslim Imperialistic Mind in the Late Ottoman Empire

研究代表者

佐々木 紳(Sasaki, Shin)

成蹊大学・文学部・助教

研究者番号：50587938

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、19世紀のオスマン帝国で活動したムスリム(イスラーム教徒)知識人の言説に見える帝国意識や文明意識のあり方を解明することをめざして、当時のオスマン・ムスリムの知識人が帝国の内外で発行した新聞・雑誌・パンフレットなどの刊行物を分析し、当時のオスマン帝国が抱えていた諸問題および世界史的文脈にも留意して、彼らが抱えていたオスマン帝国版の帝国意識・文明意識のあり方を考察した。3年間の研究で得られた成果は、著書2編、学術論文2本、学会報告1回において発表することで、オスマン版の帝国意識の存在を学界・社会に発信した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to examine the existence of imperialistic mind and the mission of civilization which were expressed in the discourse of Ottoman Muslim intellectuals. Paying attention to the internal and global context which the Empire was placed in, we analyzed Ottoman Turkish newspapers, periodicals, and political pamphlets published inside and outside of the Empire in the second half of the 19th century, and found out Ottoman Muslims' imperialistic mind expressed in their articles. The results and conclusions of this study were published in two books, two articles, and one presentation to be sent out to both the academic circle and the public.

研究分野：オスマン帝国近代史

キーワード：オスマン帝国史 トルコ近代史 ムスリム知識人 帝国意識 文明意識 定期刊行物 パン・イスラーム主義 アジア史

1. 研究開始当初の背景

(1) 問題関心

「帝国意識」とは、帝国支配層のあいだに、みずからが支配者たることを当然のこととする意識や心性のことである(木畑洋一『イギリス帝国と帝国主義』有志舎、2008年)。イギリス帝国史研究の文脈で提唱された帝国意識は、フランス・ドイツ・アメリカ・日本など、19世紀後半以降、帝国主義的対外進出と植民地体制の構築を進めてきた他の列強の支配層にも認めることができる(北川勝彦・平田雅博編『帝国意識の解剖学』世界思想社、1999年)。

本研究テーマの着想にいたった発端は、20世紀初頭に終焉を迎えるまでのおよそ600年にわたり中東・北アフリカ・バルカンの主要部分を勢力下におさめてきたオスマン帝国の支配層たるムスリム(イスラーム教徒)にも、上記の意味での帝国意識を見いだせるのではないかと、という点にある。

(2) 学術的背景

オスマン・ムスリムの帝国意識に注目するにあたっては、近年のオスマン近代史研究における新たな研究動向が、重要な学術的背景をなしている。これまでオスマン帝国は、列強による帝国主義的対外進出の「対象」ないし「客体」として、近代世界の歴史のなかに位置づけられる傾向にあった。ところが、近年のオスマン史研究では、19世紀以降のオスマン帝国を、同時代の欧米やアジアの列強と同じく、領土の保全と拡張および国内統治の強化に努めた「近代帝国」の一つと捉え、帝国主義・植民地主義の時代における世界史的共時性のなかに「列強としてのオスマン帝国」を位置づけなおそうとする新たな研究動向が生まれている。

じっさい、「オスマン版の帝国主義」の存在を指摘する U・マクディスイー(U. Makdisi, “Rethinking Ottoman Imperialism: Modernity, Violence and the Cultural Logic of Ottoman Reform,” in J. Hanssen et al. eds., *The Empire in the City: Arab Provincial Capitals in the Late Ottoman Empire*, Würzburg, 2002, pp. 29-48) や、近代オスマン帝国における「内国植民地主義」の問題を論じた S・デリングル(S. Deringil, “They Live in a State of Nomadism and Savagery”: The Late Ottoman Empire and the Post-Colonial Debate,” *Comparative Studies in Society and History*, 45/2 [2003], pp. 311-342) などの研究を通して、研究の方向性は示されてきた。日本でも、上記の研究動向をいち早く紹介した秋葉淳(「近代帝国としてのオスマン帝国」『歴史学研究』798 [2005], pp. 22-30) や、オスマン帝国通史に上記の「新しい」オスマン帝国像を反映させた林佳世子(『オスマン帝国 500年の平和』講談社、2008年)

らの研究を通して、近代世界における帝国主義支配の「主体」としてのオスマン帝国像に関心が集まっている。

ただし、上述した近代オスマン帝国の帝国主義的・植民地主義的側面に関する研究は、現在のところ、時期的には19世紀末から20世紀初頭の君主アブデュルハミト二世(在位1876-1909年)の治世を対象とするものがほとんどである。また、史料面では、行政文書を扱う研究が大半を占めている。この結果、帝国主義的・植民地主義的支配の主体としてのオスマン帝国の政策決定過程や政策実施状況など、「近代帝国」としてのオスマン帝国のいわば「ハード」な側面に関する研究は進捗したものの、そうした「近代帝国」に生きる人びとの意識や心性のあり方にかかわる「ソフト」な側面についての研究は立ち遅れていると言わざるをえない。

(3) 研究構想の具体化

本研究の代表者は、オスマン帝国近代史、わけても1860年代から70年代に展開されたオスマン・ムスリムの知識人による立憲運動および憲政思想を、オスマン・トルコ語(アラビア文字で表記されたトルコ語)の新聞雑誌の分析を通して研究してきた。そして、オスマン・ムスリムの憲政思想に見える一種の支配者意識や文化的優越意識の存在を指摘し、博士論文を含むいくつかの論文・学会発表で断片的に報告してきた(たとえば、論文「ナームク・ケマルの立憲議会構想：国家評議会からウスーリ・メシュヴェレトへ」『史学雑誌』115/2 [2006], pp. 1-35; 学会発表「近代オスマン人の帝国意識：帝國的知識人としての新オスマン人」日本中東学会第27回年次大会、於京都大学、2011年5月22日; 学会発表「近代オスマン帝国の知識人と帝国意識」北海道大学スラブ研究センター・新学術領域研究第4班研究会「オスマン帝国史：比較の視点から」、於北海道大学スラブ研究センター、2011年7月9日)。このような準備作業を重ねるなかで、オスマン帝国史はもとより、イギリス帝国史やロシア帝国史など他地域・他分野の研究者からも好意的な反響を得ることができた。

以上の問題関心および学術的背景に基づき、これまで積み重ねてきた当該テーマに関する萌芽的・断片的な研究をさらに発展させる形で、より体系的かつ多様な角度から、近代オスマン帝国におけるムスリム知識人の思想的営為に見える帝国意識・文明意識の解明を志すにいたった。

2. 研究の目的

本研究は、19世紀のオスマン帝国で活動したムスリム知識人の言説に見える帝国意識や文明意識のあり方を明らかにすることをめざす。

具体的には、近代オスマン帝国における帝国意識の揺籃期と考えられる、1860年代が

ら 70 年代を中心に、オスマン・ムスリムの知識人が帝国内外で発行した新聞・雑誌・パンフレットなどの刊行物を分析することで、当時のオスマン帝国が抱えていた諸問題や世界史的文脈にも留意して、彼らが抱えていたと考えられる帝国意識や文明意識のあり方を考察する。これにより、近代オスマン帝国におけるムスリム知識人の思想的営為を、広く近代世界の世界史的文脈のなかに位置づけるための基礎的な実証作業の完成をめざす。

3. 研究の方法

本研究は、近代オスマン帝国のムスリム知識人の言説に見られる帝国意識のあり方を、オスマン・トルコ語やフランス語等で発行された新聞・雑誌・パンフレットなどの一次史料の分析を通して明らかにする、実証的な歴史学研究の手法を採る。

(1)対象と範囲

本研究では、1860年代から70年代にかけて、オスマン帝国の帝都イスタンブルをはじめ帝国の内外で発行された定期刊行物やパンフレットに掲載された論説や記事をもとに、下記の2点に注目してムスリム知識人の帝国意識を分析する。

オスマン・ムスリムの知識人の思想的営為における帝国意識や文明意識とイスラームとの関係：

文明意識は、対外的・対内的にみずからの文明論的優越性をアピールすることによって支配の正統性／正当性の確保を図るという点で、帝国意識と表裏の関係にある。オスマン・ムスリムの知識人の議論において、そうした文明意識と帝国意識は、対外的には「列強の一員」としてのオスマン帝国の理想化されたイメージをアピールし、対内的には多宗教・多言語・多民族国家としてのオスマン帝国における支配層としてムスリムの矜持を強調することで発出されることになる。したがって、西洋文明とイスラームとの関係、およびオスマン帝国内のムスリムと非ムスリムとの関係をオスマン・ムスリムがいかに論じているか、という点を分析することで、彼らの帝国意識や文明意識を析出することが可能になると考えられる。

オスマン版の内国植民地主義としてのパン・イスラーム主義：

イスラームの文明論的優位を説くオスマン・ムスリムの知識人の議論は、1870年代に入ってオスマン帝国の論壇に登場したパン・イスラーム主義をめぐる議論のなかで、さらに深められていく。そこで説かれた「イスラームの統一」ないし「ムスリムの連帯」というスローガンは、世界各地のムスリムの国際的・地域横断的な連携という側面にもまして、何よりもまず、オスマン帝国内のムス

リム臣民の統合の強化という側面を有していた。つまり、帝国の地理的・文化的「周縁」に住まう「未開」で「遅れた」ムスリム住民に、「文明」的で「正しい」イスラームを広めることで「近代帝国」の統合／均質化を図る、というオスマン版の「文明化の使命」ないし「内国植民地主義」とも呼ぶべき文脈のなかで論じられていた。とすれば、一般にパン・イスラーム思想というと、ジャマルッディーン・アフガーニーの所説に代表される反帝国主義的な側面が強調される傾向にあるものの、オスマン・ムスリムの知識人が説くパン・イスラーム思想は、「近代帝国」の枠組を前提としている以上「帝國的」たらざるをえない、という見通しが得られることになる。本研究では、1870年代に発行された新聞やパンフレットを分析し、オスマン・ムスリムの帝国意識とパン・イスラーム主義との関係を明らかにする。

(2)史料と調査

本研究では、1860年代から70年代にオスマン帝国の内外で発行されたオスマン・トルコ語の新聞・雑誌・パンフレットを主たる一次史料とする。

1860年代については、オスマン政府の言論弾圧により西欧諸国への亡命を余儀なくされた「新オスマン人」と呼ばれるオスマン・ムスリムの知識人グループが、亡命先のパリやロンドンで発行したオスマン・トルコ語の政論新聞『自由』(ヒュツリイェト、1868-1870年)や『報道者』(ムフビル、1867年)を主たる分析対象として、新オスマン人の議論における帝国意識や文明意識のあり方を考える。1870年代については、同時期に帝都イスタンブルで発行された代表的なオスマン・トルコ語の大衆日刊紙『洞察』(パスィーレト、1870-1878年)を中心に、政治的パンフレットなども交えながら、パン・イスラーム思想の生成過程と帝国意識・文明意識との関係を考える。

オスマン・トルコ語の定期刊行物史料は、トルコ共和国に所在する図書館・研究施設、わけてもイスタンブルのアタテュルク文庫(Atatürk Kitaplığı)、ベヤズト国立図書館(Beyazıt Devlet Kütüphanesi)、トルコ宗教財団イスラーム研究センター(Türkiye Diyanet Vakfı İslâm Araştırmaları Merkezi)に多数所蔵されている。館内のデスクトップで簡単に閲覧でき、電子画像を有料で入手することもできる。また、上述のベヤズト国立図書館やアンカラの国立図書館(Milli Kütüphane)のウェブサイトでは、定期刊行物史料の電子画像が公開され、有料または無料でダウンロードできる。したがって、本研究では、トルコ共和国の関連施設への出張を通して史料の調査・収集をおこなう一方、上記ウェブサイトも積極的に活用して史料の調査・収集の効率化を図る。

4. 研究成果

(1) おもな成果

本研究のおもな成果は、研究期間中に発表した著書 2 編（単著 1・共著 1）、論文 2 本、学会発表 1 回などを通して、広く学界・社会に向け発信した。成果の概要は、下記の 2 点にまとめることができる。

オスマン・ムスリムの知識人が抱く帝国意識の実証的析出：

本研究の最大の目標である、オスマン・ムスリムの知識人の言説に見えるオスマン版の帝国意識を、オスマン・トルコ語の定期刊行物史料の分析を通して実証的に析出した。その成果の骨子は、単著『オスマン憲政への道』（東京大学出版会、2014 年）のとくに第 3 章で発表した。

1860 年代から 70 年代にかけて、オスマン帝国の内外で、新聞雑誌を通してオスマン政府批判および立憲運動を展開した新オスマン人は、一方では、近代世界の列強の一員となるべく、オスマン帝国も憲政を導入して強国化に努めねばならない、と説いた。

他方で、構想中のオスマン憲政のもとでのムスリムと非ムスリムとの関係のあり方を論じる新オスマン人は、イスラーム国家では権利のうえで住民の「平等」が保障されているとしながらも、しかし、オスマン帝国のムスリムと非ムスリムとの関係を具体的に論じる段になると、両者のあいだの絶対的な懸隔を強調する。つまり、オスマン憲政が実現したあかつきであっても、帝国の「征服者」にして「治者」たるムスリムと、「被征服者」にして「被治者」たる非ムスリムとの関係が揺らぐことはない、とする。この主張を支える根拠として新オスマン人が例示するのは、イギリスによるインド支配やフランスによるアルジェリア支配など、列強による帝国主義的・植民地主義的支配の「現状」であった。新オスマン人は、オスマン帝国におけるムスリムと非ムスリムとの関係を、列強植民地における支配・被支配関係のアナロジーで捉えることで、「治者」たるムスリムの支配的地位を当然視し、正当化しようとしているのである。ここに、オスマン・ムスリムとしての新オスマン人が抱く、オスマン版の帝国意識を看取することができる。

そうしたオスマン版の帝国意識の存在を踏まえて、いま一度、新オスマン人の立憲議会論を振り返ってみると、列強の一員たるべく憲政を導入せよと説くことと、そうして生まれることになるオスマン憲政のもとでは帝国の「治者」たるムスリムが主導的な役割を果たすべきであると説くこととは、彼らの議論のなかではみごとに整合性を保っていることがわかる。オスマン・ムスリムの知識人の思想的営為のうち、最も重要な部分を占めると考えられる憲政思想のなかに、オスマン版の帝国意識の表出を見いだしたことは、

本研究における最大の成果の一つである。

オスマン帝国のパン・イスラーム思想における帝国意識の表出：

同じく、19 世紀後半のオスマン・ムスリムの知識人による思想的営為のなかで重要な位置を占めるパン・イスラーム思想についても、そこにオスマン版の帝国意識、とりわけ内国植民地主義的な支配者意識を見いだすことができる。オスマン帝国におけるパン・イスラーム思想は、その名称から受ける印象に反して、極めて世俗的・非宗教的な契機から発生した。オスマン帝国におけるパン・イスラーム思想の本格的なイデオロギー化は 1870 年代に始まるが、そもそもの契機は、1870 年にヨーロッパで勃発したプロイセン・フランス戦争（普仏戦争）によって生じた国際情勢の流動化にある。この状況に際してオスマン知識人は、戦勝国のプロイセン（ドイツ）と連携することで積年の宿敵であるロシアに対抗する、という情勢分析を共有した。とくに、オスマン・ムスリムのジャーナリスト、アフメト・ミドハトは、この状況を『洞察』紙上で分析し、ドイツ・オーストリアの「パン・ゲルマン主義」とオスマン帝国の「パン・イスラーム主義」とが連帯することで、ロシアの「パン・スラヴ主義」に対抗しうる、と論じた。

しかし、ひとたびパン・イスラーム（当時の言葉では「イスラームの統一」ないし「ムスリムの連帯」）が叫ばれるや、『洞察』紙上をはじめオスマン・トルコ語の諸新聞では、世界各地のムスリムによる政治的連帯が議論される一方、オスマン帝国の周縁部に住まう「遅れた」ムスリムの啓発という形でオスマン版の「文明化の使命」が説かれ、また、そのための辺境統治の強化がオスマン版の「内国植民地主義」の文脈で論じられていくことになる。こうした方向でパン・イスラーム思想の帝国主義的イデオロギー化に貢献したのは、『洞察』で「イスラームの統一」に関する多くの論説を発表するのみならず、1873 年にその名も『イスラームの統一』（イッティハード・イスラーム）と題する小冊子を発行したオスマン・ムスリムの官僚にしてジャーナリストのエサトであった。この小冊子は、これまで 1870 年代のパン・イスラーム論議の縮刷版的な史料として知られてきた。しかし、帝国の周縁部のムスリムに対する「文明化の使命」や「内国植民地主義」という補助線を引くことで、この小冊子からは、オスマン版の帝国意識に裏打ちされた当時のオスマン・ムスリムの対外認識を読みとることが可能になる。オスマン帝国におけるパン・イスラーム思想の生成においてオスマン版の帝国意識が果たした触媒としての役割に留意すると、オスマン・ムスリムの知識人が練り上げたパン・イスラーム思想が、帝国主義的・植民地主義的な性格を有していたことが明らかになる。

(2)位置づけとインパクト

以上に見たとおり、本研究で明らかとなったオスマン版の帝国意識は、オスマン憲政思想の発展においても、パン・イスラーム思想の生成過程においても、オスマン・ムスリムの知識人の思想的営為における通奏低音としての存在感を有していた。

こうしたオスマン版の帝国意識は、19世紀末から20世紀初頭にかけて30年にわたり君主専制体制を確立したスルタン、アブデュルハミト二世の治世にさらに増幅されていくものと考えられる。というのも、すでに先行研究で明らかにされているとおり、帝国周縁部のムスリム諸部族に対する「文明化」政策や、軍艦エルトゥールル号の周航などに代表されるパン・イスラーム主義的宣伝活動など、オスマン・ムスリムの文明意識や帝国意識を高揚させる政策が実施されていくのが、この時代であったからである。

この意味で本研究は、1860年代から70年代におけるオスマン版の帝国意識のあり方を実証的に明らかにした点に研究成果の独自性を有するのみならず、後続するアブデュルハミト二世の治世の時代像を考えるうえでの新たな視座を提供している点で、オスマン近代史研究の水準の底上げに貢献したものと考えられる。さらに、本研究を通して実証されたオスマン版の帝国意識は、近代世界において広く観察される帝国意識、わけでも19世紀後半以降の日本(大日本帝国)・中国(清朝)・タイ(ラタナコーシン朝)などに見いだすことのできる「アジアの列強」の帝国意識の比較研究に、実証的な情報と展望とを与えることとなる。

(3)今後の展望

本研究を進めるにあたって、オスマン・ムスリムの代表的存在として注目した新オスマン人は、オスマン版の帝国意識に裏打ちされた立憲議会論を展開した。彼らの立憲議会論ないし憲政思想については、これまで、おもに西洋思想とイスラーム思想の双方の影響を分析するという方向で研究が進められてきた。しかし、本研究で帝国意識や文明意識という観点から新オスマン人の議論を分析しなおした結果、彼らの議論のなかに、「西洋」とも「イスラーム」とも異なる、「オスマン帝国そのもの」に対する強烈な自負が表出していることに気づかされた。

そこで、近年進捗の著しいオスマン近世史研究の成果を援用しながら、近世史と近代史とをまたぐ形で思索を繰り広げていくオスマン・ムスリムの思想的営為を、改めて考察する機会を持ちたいと考えるにいたっている。今のところ、本研究の枠内で、論文「オスマン憲政史の新しい射程：近世史と近代史の接合に向けて」『新しい歴史学のために』(京都民科歴史部会、285号、2014年、37-51頁)を作成し、また、学会発表“After the

‘Second Empire’: New Horizons of Ottoman Constitutional History,” (The Third International Symposium Inter-Asia Research Networks, Toyo Bunko, Bunkyo-ku, Tokyo, 1 March 2015)をおこなうなど、研究動向を整理し、研究の方向性を示すことに努めている。近世史と近代史とを通観/通貫する形で描かれる、新しいオスマン憲政史研究を準備するにあたって、本研究の成果が大いに役立つであろうことは疑いない。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

佐々木 紳「オスマン憲政史の新しい射程：近世史と近代史の接合に向けて」『新しい歴史学のために』(京都民科歴史部会)285、2014年、37-51頁、査読なし。

佐々木 紳「オスマン帝国と中央アジア：アリ・スアーヴィーのまなざしから」『海外事情』(拓殖大学海外事情研究所)60/9、2012年、49-60頁、査読なし。

〔学会発表〕(計1件)

SASAKI, Shin, “After the ‘Second Empire’: New Horizons of Ottoman Constitutional History,” The Third International Symposium Inter-Asia Research Networks (Toyo Bunko, Bunkyo-ku, Tokyo), 1 March 2015.

〔図書〕(計2件)

佐々木 紳『オスマン憲政への道』東京大学出版会、2014年、296頁。

柳橋博之編『イスラーム 知の遺産』東京大学出版会、2014年、221-258頁。(共著、分担執筆、佐々木 紳「第8章 ナームク・ケマル『祖国あるいはスィリストレ』：19世紀オスマン帝国の愛国的戯曲をめぐる」)

6. 研究組織

(1)研究代表者

佐々木 紳 (SASAKI, Shin)

成蹊大学・文学部・助教

研究者番号：50587938